葬儀式を考えるパンフレット

# 大切な人・ご自身の“もしも”の時のために

## ～亡き人・遺された人のために葬儀を大事に考えたい～

## 1．はじめに

### 葬送儀礼の多様化と葬祭ビジネスの問題点

現代社会は高度医療の発展と介護施設の整備によって「老いる」ということや「死」ということが日常から少し縁遠い感覚になっているように感じます。さらには経済活動（仕事）中心に生活が成り立っているために忙しい毎日を過ごし、人間が持っているそれら根本的な苦悩（老・病・死）について考える機会を失って生きている私たちです。

そんな時代状況の中で、都市部では葬送儀礼の簡略化や無宗教化が進み、病院から火葬場に直接むかって身内のみでお別れをする「直葬」と呼ばれる時短・簡略スタイルや、豪華に彩られた生花に包まれたセレモニー形式のお別れ会など葬送儀礼が多様化しており、その中心にはビジネス（商売）としての葬儀社が存在しており、企画・仲介役に欠かせない存在となっています。

葬送には様々な形があることはそれぞれの宗教観・生死観があり、悪いことではありませんが、その一方で商業的要素が濃い一部葬儀社が巧みな誘導によって費用が高額になったり、積立てた会費が使えずに別途支払いが必要になるというトラブルに発展するケースの相談が多々あります。また、“無宗教”を前面に出す商業化された葬送儀礼は、本来人間が持つ「命に対する尊敬」の心が奪われていくことに繋がっていくと考えられるのではないでしょうか。

「葬儀の準備なんて縁起でもない」などというお怒りの声も聞こえてきそうですが、今改めて仏教が持つ葬送儀礼の意味を確かめ、さまざまな情報を知っておくことで“流されない”という力をつけていただきたいと思います。そのため、正法寺では気軽に相談できるように真宗大谷派における一般的葬儀知識をパンフレットにまとめましたのでご活用いただければ幸いです。

## ２．事 前 の 心 得

### 先を考えることは「本当に大切なこと」を考えること

葬儀を考えることは“人生の終わり”について考えることであるため、縁起でもないと否定的に感じたり、後ろ向きなイメージを持たれるかもしれません。しかし、“人生の終わり”について考えることは「生き方」や「人生そのもの」を見つめることで、とても大切なことなのです。

また、人間は生まれてからいのち終えるまで、家族や友人、仕事の仲間や地域の人、そして目に見えない多くの人との関わりの中で生きています。そしてその人生の終末期や自身の死後にも多くの人たちが関わっていきます。

仏教は「どう死んでいくか」あるいは「死んだ後どうなるか」ということだけでなく、今日いただいているいのち、死にゆくいのちを「いま、どのように生きて往(い)くのか」ということに向き合うことが説(と)かれています。大切な人の生涯、あるいはご自身の生き方を通して改めて向き合わされるいのちについて、また人の繋がりについて考えるきっかけにしてみましょう。そこから見えてくることは「本当に大切なこと」ではないでしょうか？その「本当に大切なこと」をお聞きしながら丁寧にご葬儀をお勤めさせていただきます。

## ３．決 め て お き た い こ と

### 1） 葬送に関わる会場を決めておく

① 臨終後～出棺まで
- A　自宅に安置する
- B　正法寺同朋会館を使用する（宿泊可）
- C　葬儀社の通夜会館を使用する

※ 自宅に一時安置し、通夜等会葬者が増える段階から同朋会館に移ることもできます

② 葬儀会場
- A　自宅で勤める
- B　正法寺本堂で勤める（親族 40 名・会葬 50 名程度可）
- C　葬儀社の斎場・ホールを使用する
- D　地域の公民館や集会所など

③ お斎会場
- A　自宅で仕出しを取る
- B　正法寺同朋会館を使用し、仕出しを取る（40 名程度）
- C　葬儀社の会場を使用する
- D　ホテル・温泉等の会場を使用する

※ 正法寺では葬儀費用を抑えることができる本堂葬・会館利用を推奨しております。
本堂・会館使用料は護持会収入として正法寺の護持運営に役立てられます。（料金は別途記載）

### 2）葬儀社を選んでおく

臨終後にはご遺体の搬送や葬儀日程の段取り、物品手配や様々な事務手続きが必要なため、葬儀社への依頼は欠かすことができません。しかし、葬儀社にも様々あって選ぶ基準が難しそうです。中には喪主さんが県外在住であったり、葬祭費用をなるべく安くしたいと考えてインターネットから会社を選ぶこともあるかもしれません。しかし、その情報は本当に確かでしょうか？「セットプラン」を謳（うた）っていても、必要なものが「オプション」といわれる加算方式になっていて後日請求された時には予想以上の費用負担に驚いたという話は数多くあります。また、業者によっては営業ノウハウがあって、言葉巧みに誘われて最後は断り切れなくなったという相談もあります。年会費（積立金）にもカラクリがある会社も存在しますので、選ぶ際には注意が必要です。

※ 正法寺が特定の業者を勧めたり、排除しているわけではありません。直接の相談事例や親戚寺院・同派寺院の相談情報を基に書かせていただいております。

### 3）葬儀・火葬を「分けて行う」か？「同日行う」か？

東北地方の慣習では火葬を先に行い、後日お骨でもって葬儀を勤めることが一般的でした。時間をかけて大切に勤めていたのでしょう。しかし、近年は効率化やコロナ下の影響もあり、一日で葬儀と火葬を勤める機会が増えています。（同日の場合は葬儀執行後に火葬します）

どちらの形で勤めても構いませんが、一連の葬儀式は亡き人がご遺体の姿でもって教えを伝えてくださる（体説法（たいせっぽう））時間です。親族・知友等は、効率化を優先するあまり、忙しさでその大切な時間を疎かにすることのないように心がけたいものです。

## 4．葬儀までの流れ

### 1）臨終期について

- まず、近しいご親族に連絡をして相談・協力のお願いをします。
- 少し落ち着いたらお寺にご連絡ください。後ほどご遺族、葬儀社と住職で打合わせをします。
- 自宅以外でお亡くなりになったら葬儀社に連絡をしてご遺体のお迎えを依頼します。
- あらかじめ決めておいた安置する場所（自宅・同朋会館・葬儀社の斎場等）にお連れします。
- ご親族・近所の方と役割分担などを確認しておくと良いでしょう。

※ 大切な人が亡くなられた直後は悲しみと混乱でいっぱいです。少し落ち着かれてから準備を始めましょう。

### 2）枕経について

- 枕経は「臨終勤行」ともいい、亡き人と遺された人が一緒に勤める最後の勤行です。亡き人と共に手を合わせてきたご本尊の前で、過ごした時間を思い出しつつ報恩感謝のお勤めです。
- 喪主、親族、親戚、近所の方と葬儀の準備を一度止め、一緒にお勤めします。
- 法名は生前中に帰敬式を受式することが多いですが、未受式の方は枕経の前に執行します。
- 法名をつける際、人柄やご生涯を振り返った時に思い浮かぶ出来事をご遺族にお尋ねします。
- 枕経が終わりましたら、葬儀までの流れや時間など簡単な打ち合わせをします。

※ 祭壇について、自宅に安置される場合は慣れ親しんだお内仏の前であれば十分な荘厳（おかざり）となります。祭壇を設ける場合はお内仏にある仏具を使いながら、華美にならないように気を付けましょう。（祭壇の荘厳や安置方法、入棺時の服装等は次章で説明します。）

## 3）納棺について

- 真宗門徒の服装は、単衣の白衣に白足袋をつけて（肩衣（かたぎぬ）をかけ）、合掌した手に念珠をします。※手甲や脚絆、ワラジや杖、守刀などの死に装束は特に必要ありません。
- 納棺前に湯灌で体を清め、お化粧をしたりしますが、これらは大切な人への敬愛と惜別の心を表したものです。どうぞこれまでの感謝の気持ちを込めて身に触れてお別れをしてください。

※ 納棺は死出の旅路の準備ではありません。亡くなられた方のお姿は、生まれ難い人間に生まれ、いのちの限りを尽くした後の静かな安らぎの姿であり、浄土という いのち の ふるさと にお帰りになった姿です。遺された方へ亡骸（なきがら）を通していのちを伝えている諸仏（ほとけさま）として出会い直すことが納棺の意味なのです。忌み嫌うことなきよう心がけましょう。

## 4）以降の流れ

### 【A. 火葬を先に勤める場合】

4．出棺経（自宅 or 会館）
　※　勤行後、棺にお花を入れて最後のお別れ
5．出棺
6．炉前　棺前勤行（火葬場）
7．還骨勤行（自宅 or 会館）
～　後 日　～
8．葬儀
9．中陰（初七日）法要

### 【B. 葬儀・火葬を同日に勤める場合】

4．通夜（葬儀の前夜に勤めます）
5．葬儀
　※　葬儀終了後、棺にお花を入れて最後のお別れ
6．出棺
7．炉前　棺前勤行（火葬場）
8．還骨勤行
　※　中陰（初七日）法要を繰上げて還骨勤行に併せて勤めることもあります

## 5）納骨について

「葬儀・中陰法要後に納骨まで済ませたい」というご相談を受けることが多くありますが、可能な限り四十九日法要等に合わせる形で日を改めて行うことを願っております。なぜなら、御遺骨の前に座るという時間が”本当に大切なこと”であるからです。葬儀までの慌ただしい時間の中ではなかなかじっくりと亡き人と向き合うことができません。儀式を終えて日常に戻った時、在るべき人が在るべき場所にいなくなった物悲しさが押し寄せてくるかもしれません。それでも、失わなければ気づけなかったことがある、いなくならなければ見えなかったことがある…。その悲しみの中で初めて御遺骨から私に向けられた声なき声が聞こえてくるのでしょう。その”声”に私たちは育てられていくのです。効率重視の風潮に流されて簡略化してしまうことはその大切な時間を失っていくことなのです。